

## 所員の自著紹介

## 『フィリピン歴史研究と植民地言説』

著者：レイナルド・C・イレート，ビセンテ・  
L・ラファエル，フロロ・C・キブイエン

編者・監訳者：永野善子

めこん出版社 2004 年 8 月 (389 頁)

本書は、意欲のかつ刺激的な研究活動を続け、それゆえにさまざまな論争を巻き起こしている、3人のフィリピン人研究者の示唆に富む論文8篇を選びすぐり翻訳したものである。この3人の著者とは、『キリスト受難詩と革命——1840年～1910年のフィリピン民衆運動』の刊行で、フィリピン革命史研究に新たな地平を切り拓き一躍脚光を浴びた、レイナルド・C・イレート。『契約としての植民地主義——初期スペイン統治支配下のタガログ社会における翻訳とキリスト教への改宗』で、植民地時代の分析にポスト構造主義理論を導入する意欲的試みに成功したピセンテ・L・ラファエル。そして、『挫折した民族——リサル、アメリカのヘゲモニー、フィリピン・ナショナリズム』で、アメリカ植民地時代に定説化したフィリピンの国民的英雄ホセ・リーサル像の脱構築に挑戦したフロロ・C・キブイエである。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

## 『近代漢語の研究』

## — 日本語の適語法・訳語法 —

高野繁男著

明治書院 2004 年 11 月 (273 頁)

日本語の語彙研究が本格化して40年あまり、その初期の頃から参加した著者が、これまでの語彙研究にひと区切りをつける著書である。本書は、書名が示すように、日本語の造語法・訳語法の研究である。1つは江戸の蘭学の訳語、2つは

幕末・明治初期の訳語を扱っている。とくに、訳語が和語でなく漢語であること（なぜ、漢語か）。これを蘭学が行ったこと。その理由は、蘭学者の教養と漢字の機能 (morpheme → stem) によるものであること。そして、これが近代の英学に引き継がれたことなどを基本に論を展開した。こうして造語された和製漢語の研究は、語誌研究に限らず、今日も使用されている「現存語」に注目されるが、とくに造語法・訳語法の研究では、むしろ消えてしまった「消滅語」との比較によることが条件になる。（現存語と消滅語）理系の語は、前代を継承するが、文系の訳語造りは新たな挑戦になった。ここでは、とくに消滅語（どうして消滅したのか）の分析がカギである（理系と文系の訳語）などを論じた。〈目次〉のうち主な項目を示す。『医語類聚』の訳語／『哲学字彙』の訳語『百科全書』の語彙／『明六雑誌』の語彙「蘭学語資料の語彙」（『訳鍵』『蘭学訳撰』）

[illegible]

## 『米国留学紀行 — 英語教師の視点から』

石黑敏明著

リトル・ガリヴァー社 2005 年 1 月 20 日 (207 頁)

過去 35 年の間 4 度の海外留学・研修の機会を得、その間書き綴ったのが今回の留学体験記である。第一回の留学は 1970 年に国際ロータリーの留学生としてオハイオ州ハイデルベルグ大学で、二回目の留学は 1979 年から 1982 年までフルブライト奨学生としてサンディエゴ州立大学とスタンフォード大学で学び、三回目は 1993 年から一年間、長期在外研究員としてハワイ大学で言語習得と喪失の研究に、四回目は 2001 年 1 月から 3 月まで短期在外研究員として BYU 大学で言語喪失

に関する研究に従事した。第一章の出発編では、虫や花や動物をじっと観察した様子が描写されている。出会い編後半は、教え子との米国での再会、劇的な分だけ私の記憶から消え去ることはない。第三章は米国内で生き続ける日本文化について。日本語学校や教会での日系アメリカ人との出会いは、日本人として外国に生きることを考える上でとても意義深かった。さらに滞在中に体験した社会問題は、今読んでも私にとって新鮮である。第四章はハワイ大学と BYU 大学の様子を客員教員の立場で内から観察したもので、趣味の面では日米のスポーツに関する違いに触れることができたのは意義深かった。第五章の家族編では子供との米国での経験、子供の成長記録などプライベートな記事が多いが、私にとって最も記録し記憶しておきたいことだったので、今回の留学紀行の最後に付け加えた。